

最期を家族と共に支え合うには

◆キーワード

- 1 看取り支援
- 2 チームケア
- 3 本人・家族の思い

～今までの看取り支援を振り返って～

徳島県・藍住町

いりょうほうじんりょううんかい ぐるーぷほーむ おやのいえ
医療法人凌雲会 グループホーム 親の家

発表者：介護福祉士 平川 公大

共同研究者名：稲次正敬 稲次圭 稲次美樹子
福富郁代

平成 17 年 12 月 1 日開設
2 ユニット定員 18 名
併設事業所 小規模多機能ホーム親の家

(理念)
利用者は介護を受ける人ではなく生活の主役である。
利用者の心の動きに共感しありのままを受け止める。

(取り組んだ課題・はじめに)

グループホーム親の家(以下親の家)は、開設から 10 年の間で退居者が 33 名います。その内、看取り支援を行ったご利用者は 11 名いる。

開設当初から医療・訪問看護と連携し、入居時に事前指定書で急変時や終末期の意向をご家族に伺い、状態の変化時に意向の確認を繰り返し行っている。

生活の場である親の家は、看取りを特別視するのではなく、普段の支援の延長上だと捉えている。またご家族と一緒に支援することを大切に考えている。ご利用者が馴染みの環境である親の家で今までと変わらないありのままな生活を送り、ご家族の方に見守られながら最期を迎えられるように支援している。

此度、今までの支援が間違っていなかったか？今後もこのような支援を続けていくべきか？再検討するべく、昨今看取り支援を行った 3 名のご利用者のご遺族に聞き取りを行った。

(倫理的配慮)

ご利用者のご遺族に、十分に配慮して聞き取りを行い、発表に際しての承諾を得ている。

(具体的な取り組み)

- ① アンケートを作成し、ご家族に答えていただく。
 - a 故人の最期の迎え方に満足しているか
 - b グループホームで看取るにあたって、不安や不満を感じたか
 - c 医療面での対応で気になる事はあったか
- ② アンケートをもとに、親の家職員での看取り支援について「我々に何が出来るのか？」話し合う。
- ③ 親の家職員、医師、訪問・外来看護師で、ご利用者を家族と共に支えるために、それぞれの役割として、チームケアとして、今後どのように支えていくべきかもう一度話し合う。

(活動の成果と評価)

- ① ご家族のアンケートで、故人の死から時を経た今だから言える本音や不安を知ることが出来た。
- ② アンケートをもとに、親の家はもとより医療を含むチーム全体で、今後の看取り支援の在り方を再検討することが出来、また、連携体制や、それぞれの役割を把握し合うことで、より強く結束する機会が出来た。
- ③ ご家族によっては、「親の家で最期まで」という思いだけではなく、医療面でのケアを多く望むご家族や、介護面でのケアを多く望むご家族等種々多様であり、それぞれのニーズに応えた最後の迎え方を視野に入れ、柔軟な対応が必要であることが分かった。

(今後の課題・考察・まとめ)

看取り支援は、親の家職員による精神的支援と医療スタッフによる医療的支援の両側面のバックアップによって、ご利用者の不安の軽減を、バランスよく図っていくことが大切である。

「父、母の最期は親の家で」と言う思いがあるご家族に対しては、状態に変化があるたび、事前指定書等を用いて、話し合いの場を何度も設けることで、ご利用者を支えるすべてのスタッフとの面識を得られ、思いや不安を遠慮なく話せる関係を築くことができ、一人で抱え込まず、安心してご利用者を一緒に最期まで支えていけるのではないだろうか。

そのためにも、普段からご家族の不安や本音をいふことが出来る関係を築き、それぞれのご利用者やご家族のニーズを聞き取り、そのニーズに合った看取り支援ができるようになるのではないかと感じた。